

台湾人中上級日本語学習者における 縮約形の使用意識に関する一考察

羅濟立/Luo, Ji-Li

東吳大學日本語文學系 副教授

Department of Japanese Language and Culture, Soochow University

【摘要】

「けれども→けど」等等縮約表現，一般認為是日語學習者在聽解或是運用上感到較困難的項目之一。本研究的目的在以台灣中上級學習者為對象進行問卷調查，探討學習者 1) 對 19 種縮約形(場面分為正式の場合以及非正式場合)的使用意識為何? 2) 「想使用」群和「不想使用」群的使用意識有無差別? 針對所獲資料使用 Excel 計算各變數(項目)的基礎統計。為了探討「想使用」群和「不想使用」群的差異，進行各項目的 t 檢定。

【關鍵詞】

中上級日語學習者，縮約形，使用意識，正式場合，非正式場合

【Abstract】

Contraction expressions such as “けれども→けど” are generally considered difficult for Japanese learners in listening comprehension and application. This study conducted a questionnaire survey of intermediate and advanced Japanese learners in Taiwan to explore 1) the use consciousness of learners regarding 19 contraction expressions (including those used in formal and informal occasions); and 2) differences in the use consciousness between learners who are willing and those who are unwilling to apply contraction expressions. A basic statistical process was performed on the obtained data for all variables (items) by using Excel software. Moreover, to explore the differences between learners who are willing and those who are unwilling to apply contraction expressions, t tests on all items

were conducted.

【Keywords】

intermediate and advanced Japanese learners, contraction expressions,
questionnaire survey, formal occasions, informal occasions

1. 研究の目的

「縮約形」に関する研究はこれまで数多く出されている。例えば、(土岐 1975、堀口 1989、嶺岸 1999、上原・福島 2004、浅田 2004、福島・上原 2004、東 2006、2008、2009、ボイクマン 2010、羅 2014) などが挙げられる。これらの研究はほとんどが母語話者及び JSL (Japanese as a Second Language) の学習者の比較研究を行い、その使用実態に注目してきた。東 (2008、2009) と羅 (2014) は、フォーマルな学習、つまり教室内での丁寧体を中心とした学習形態をとる中国と台湾の JFL (Japanese as a Foreign Language) の学習者の使用実態について述べているが、縮約形についての学習者の使用意識に言及していない。また、本研究に関係の深いものに小針 (2013) がある。小針 (2013) では JSL 環境の日本語学習者の縮約形の使用意識を考察している。しかし、6 名という限られた人数であり、個人差を排除できないという問題がある。その他にも、JFL の台湾人学習者がどのような使用意識を持っているのかについては触れていない。

本研究では、以上の研究を踏まえ、アンケート調査を行うことによって台湾人日本語中上級学習者の使用意識を考察していく。また、学習者を「使いたい」群と「使いたくない」群に分け、両者の異なる点について検証して、その原因を求め、学習者が縮約形の表現を適切に使用するための一助とすることを目的とする。以下、第 2 節で研究の方法、第 3 節で研究結果を述べ、その結果から分析及び考察を行い、第 4 節でまとめとする。

2. 研究の方法

2.1 縮約形の定義

本研究は縮約形の定義を『「音節数・音数・音量の減少」齋藤 (1991)、「音

の増加（拡張形）」（福島・上原 2004）と「音節の変化」（ボイクマン 2010）』とした。それに対して縮約・転訛されていないもとの形を「原形」と呼ぶ。

2.2 調査対象者

調査対象者は、台湾北部にある T 大学日本語学科の N1 と N2 に合格している学生（中上級とみなす）である。欠損値のあった質問紙であったのを除外し、分析対象者は 95 名となった。調査期間は 7 月 15 日～7 月 31 日である。

2.3 調査手続き

2015 年 7 月に T 大学日本語学科の N1 と N2 に合格している学生に Google のオンラインアンケート調査を行った。本調査で得られた情報を研究目的以外に用いることはなく、結果はすべて統計的に処理されるために個人が特定されず、調査に参加しなくとも不利益を被ることはないことを伝えた。なお、調査は無記名で実施した。

2.4 調査内容

日本語教育への応用を考えると、多くの表現を扱うことが望ましいため、ボイクマン（2010）に挙げられている転訛形（本稿では縮約形）を参考に分析対象の表現を選定した。ボイクマン（2010）では、丁寧体基調の会話における日本語母語話者の縮約形について、それぞれの縮約形が原形と比べどの程度使用されているのか、そして縮約形によって改まり度にどのような違いがあるのかについて調査分析した。その結果、縮約形によって 4 つのレベルがあることがわかった¹。本稿ではボイクマンの研究結果に基づき、1. 原形の使用は非常に少なく縮約形が基本である 6 項目（以下、「A 類縮約形」と呼ぶ）、2. 縮約形が原形の使用を上回り、改まり度が落ちることがない 12 項目（以下、「B 類縮約形」と呼ぶ）を対象に、質問紙を作成した。さらに、「ておく」は日本語の教科書で縮約形として一般的に取り上げられていることから、本研究で B 類縮約形として扱うこととした。

また、縮約形はインフォーマルな場面だけでなく、フォーマルな場面でも

¹ボイクマン（2010）によると、転訛形（本稿では縮約形）によって、A) 転訛形が基本であるもの、B) 転訛形が原形を上回る／同程度であるもの、C) 転訛形の使用率が原形を上回らないもの、D) 転訛形の使用率が非常に低いもの、といった四つのレベルに分類できるという。

頻繁に現れる。原形と縮約形の丁寧度・使用意識を調べるためには、丁寧体基調の会話だけでなく、普通体基調の会話についても同時に調査する必要があるため、本稿では丁寧体・普通体の会話を考察の対象とした。具体的に言えば、各縮約形項目において、会話の相手として、フォーマルな場面（親しくない友人、以下「F」と略す）とインフォーマルな場面（親しい友人、以下「I」と略す）の2種類を設定した。問題は全部で38問ある。回答形式は、「よく使う」、「たまに使う」、「どちらでもない」、「あまり使わない」、「ほとんど使わない」の5段階評定である。なお、「よく使う」を5、「たまに使う」を4、「どちらでもない」を3、「あまり使わない」を2、「ほとんど使わない」を1として得点化することによって、作成した質問紙の38項目について項目分析を行った。

なお、縮約形を使いたいか使いたくないについて、「どちらかと言えば使いたい」学習者は78名（82.1%）、「どちらかと言えば使いたくない」学習者は17名（17.9%）であった。縮約形を使いたいと考える学習者は多いことが示唆された。以下に、縮約形を使いたい学習者78名を「使いたい」群、縮約形を使いたくない学習者17名を「使いたくない」群とし、縮約形の使用意識について「使いたい」群と「使いたくない」群に差があるかも検討した。

アンケートの内容は巻末の付録を参照。質問紙には他の項目も含まれていたが、今回の分析には用いなかったものの詳細は省略した。

2.5 資料の分析

Excelを用いて分析を行った。各項目の基礎統計を算出する。縮約形を「使いたい」群と「使いたくない」群の差について検討するため、各項目の t 検定を行った。

3. 結果と考察

3.1 A類縮約形の使用意識

A類は丁寧体基調の会話でも縮約形が基本（90%以上）であるもの（ボイクマン 2010：32）である。台湾人中上級日本語学習者の使用意識は表1のような結果になった。

表 1 台湾人中上級日本語学習者における A 類縮約形の使用意識 (N=95)

	全員		使いたい群		使いたくない群		差の検定
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	F 値
1. のだ類→んだ類 (F)	3.48	1.26	3.42	1.24	3.76	1.30	0.34
1. のだ類→んだ類 (I)	3.80	1.12	3.88	1.10	3.41	1.08	0.12
2. こ/そ/あ/どのような／ に→こ/そ/あ/どんな／に (F)	3.70	1.17	3.62	1.17	4.05	1.10	0.17
2. こ/そ/あ/どのような／ に→こ/そ/あ/どんな／に (I)	3.89	1.09	4.06	0.99	3.11	1.23	0.00 (**)
3. なにか→なんか(フィラ ー) (F)	3.24	1.20	3.19	1.23	3.47	1.03	0.35
3. なにか→なんか(フィラ ー) (I)	4.09	0.99	4.23	0.83	3.47	1.37	0.04 (**)
4. みな→みんな (F)	3.71	1.04	3.70	1.08	3.76	0.80	0.80
4. みな→みんな (I)	4.09	0.99	4.16	0.93	3.76	1.16	0.20
5. なんていうか→なんて いうか (フィラー) (F)	3.25	1.15	3.25	1.07	3.23	1.43	0.95
5. なんていうか→なんて いうか (フィラー) (I)	3.88	1.03	3.93	1.00	3.64	1.13	0.35
6. (それ) では→ (それ) じゃ (接続詞) (F)	2.83	1.24	2.78	1.23	3.05	1.25	0.43
6. (それ) では→ (それ) じゃ (接続詞) (I)	4.52	0.67	4.58	0.60	4.23	0.87	0.13

注 1) 差の検定結果は、使いたい群と使いたくない群の差の検定結果である。

注 2) ** $p < 0.05$ 、* $p < 0.1$

3.1.1 A 類縮約形の全体的な傾向

全 12 項目の得点は「(それ) では→ (それ) じゃ (接続詞) (F)」を除き

すべて中央値の 3.0（得点は 1.00–5.00 の間）以上であり、台湾人中上級の学習者は A 類縮約形を使用する意識が高かったことがわかった。また、平均値が 4.0 以上の項目として高い順に、「(それ) では→ (それ) じゃ（接続詞）(I)」(4.52)、「なにか→なんか（フィラー）(I)」(4.09)、「みな→みんな(I)」(4.09) であり、すべてインフォーマルな場面での使用である。これに加えて、どの項目でもフォーマルな場面（F）の平均得点がインフォーマルな場面（I）の平均得点より低かったことから、インフォーマルな場面では縮約形の使用意識が比較的高かったことが示唆された。学習者も日本人母語話者と同様に、インフォーマルな場面での使用が多いことがわかった。嶺岸（1999）では、日常会話で頻繁に使用されている縮約形について、外国人がそれを用いた際に日本人がどう感じるかを評価実験によって検討した。それによると、インフォーマルな場面では縮約形の使用が好まれ、インフォーマルな場面での原形の使用に対しては、「かまわないが不自然だ」という評価が多いという。したがって、学習者によるインフォーマルな場面での「んだ」、「こ/そ/あ/どんな／に」、「なんていうか（フィラー）」の使用意識の平均点が 4.0 を上回らなかったことから、日本語教育ではもっと積極的に取り入れるべきであると言える。

一方、A 類は丁寧体基調の会話でも基本と言えるほどかなり高い頻度で母語話者によって使用されている縮約形である。つまり、母語話者においては縮約形がほぼ 100% 使用され、くつろいだ表現としてのニュアンスを失い、それ自体が基本形となりつつあると考えられるものである（福島・上原 2005）。しかし、フォーマルな場面では学習者の使用意識がそれほど高くなかったことは注意すべきである。12 項目のうち、平均得点 4.0 以上のものは 3 項目しかない。平均得点が低い順に、「(それ) では→ (それ) じゃ（接続詞）(F)」(2.83)、「なにか→なんか（フィラー）(F)」(3.24)、「なんというか→なんていうか（フィラー）(F)」(3.25) が 3 つ挙げられる。「(それ) では→ (それ) じゃ（接続詞）(F)」はボイクマン（2010）のデータでは基本形となっており、原形「では」の使用は皆無であった。本データに限って言えば、「じゃ」（接続詞）(F) は全員の平均得点・「使いたい」群の平均得点が中央値を上回らなかったことから、丁寧度に欠けるものと認識されていたと考えられる。一方、「なんか」と「なんていうか」はいわゆるフィラー、つまり「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続

関係を持たない。発話の一文を埋める音声現象」(山根 2002 : 49) と呼ばれる音の変化である。このような表現が形式として固定されており、くだけた印象を与えることがないという点は、学習者への説明が必要である。なお、「んだ」は場面を問わず常に原形より日本人母語話者の評価が高い(嶺岸 1999、東 2010)。学習者の使用意識が平均点「3.48」(F)と「3.80」(I)であるから、縮約形を使用することを積極的に勧める必要がある。

3.1.2 「使いたい」群と「使いたくない」群の比較

「使いたい」群と「使いたくない」群の間に差があるか検討するため、対応のない t 検定を行った。その結果、「こ/そ/あ/どのような/に→こ/そ/あ/どんな/に(I)」と「なにか→なんか(フィラー)(I)」の2項目に有意な差が見られた。どちらとも、「使いたい」群の得点に比べて、「使いたくない」群の得点のほうが低かった。このIの二項目では「使いたくない」群の学習者は縮約形に対して受動的な使用態度を大いに示したということが示唆された。

また、「使いたい」群の学習者は、どの項目においても、インフォーマルな場面での使用意識がフォーマルな場面での使用意識より高かったが、「使いたくない」群の学習者は「のだ類→んだ類」、「こ/そ/あ/どのような/に→こ/そ/あ/どんな/に」、「なにか→なんか(フィラー)」、「みな→みんな」の4項目でフォーマルな場面での使用意識に比べ、インフォーマルな場面での使用意識が低かった。学習者が丁寧な表現として縮約しない形式だけを主に使用し、自然な縮約形の使用が身につかなかったことが原因として挙げられよう。縮約形はインフォーマルな場面、親しい人間関係の中で使われることが絶対的に多く、使い方を間違えると、相手に失礼になったり、本人のマイナスイメージに繋がる恐れもある(中村他 2003 : 98)。したがって、インフォーマルな場面での縮約形の使用を学習者(とくに「使いたくない」群)には早い時期から教えていく必要があると思われる。

ただし、「使いたくない」群は「使いたい」群に比べて、すべてのA類縮約形に対して受動的な使用意識を示したわけではない。「使いたくない」群の学習者は「のだ類→んだ類(F)」、「こ/そ/あ/どのような/に→こ/そ/あ/どんな/に(F)」、「なにか→なんか(フィラー)(F)」、「みな→みんな(F)」、「(それ)では→(それ)じゃ(接続詞)(F)」の5つの項目ではより高い平

台湾人中上級日本語学習者における
縮約形の使用意識に関する一考察

均得点を示した。これらはすべてフォーマルな場面であり、フォーマルな場面での使用に比較的慣れており、丁寧度が落ちることのない縮約形として認識・使用されていると見てよい。先行研究（嶺岸 1999、ボイクマン 2010）によれば、これらはフォーマルな場面でも許容されるといった性格が強い縮約形である。そのため、縮約形に移行していくことは問題にならない。

3.2 B類縮約形の使用意識

B類は転訛形が原形を上回る／同程度（50%～80%程度）であるもの（ボイクマン 2010 : 32）。台湾人中上級日本語学習者の使用意識は表 2 のような結果になった。

表 2 台湾人中上級日本語学習者における B 類縮約形の使用意識 (N=95)

	全員		使いたい群		使いたくない群		差の検定
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	F 値
7. では+否定→じゃ+否定(F)	3.18	1.22	3.16	1.20	3.29	1.31	0.72
7. では+否定→じゃ+否定(I)	4.30	0.94	4.43	0.79	3.70	1.27	0.03(**)
8. いろいろな→いろんな(F)	3.58	1.13	3.57	1.09	3.64	1.32	0.84
8. いろいろな→いろんな(I)	4.25	0.98	4.37	0.83	3.70	1.36	0.07(*)
9. あまり→あんまり(F)	3.32	1.26	3.28	1.27	3.52	1.14	0.44
9. あまり→あんまり(I)	3.97	1.07	4.03	1.03	3.70	1.22	0.32
10. けれども→けど(F)	3.66	1.21	3.64	1.20	3.76	1.26	0.72
10. けれども→けど(I)	4.35	0.92	4.47	0.81	3.82	1.19	0.05(*)
11. ている類→てる類(F)	3.52	1.22	3.56	1.21	3.35	1.28	0.55
11. ている類→てる類(I)	4.37	0.84	4.51	0.69	3.76	1.16	0.02(**)
12. という→っていう／ っていいます(文末)(F)	3.29	1.07	3.28	1.04	3.35	1.18	0.82

12. という→っていう／ っていいます (文末) (I)	3. 92	1. 05	4. 08	0. 96	3. 17	1. 14	0. 00 (**)
13. というのは→ってい うのは (F)	3. 36	1. 09	3. 34	1. 06	3. 47	1. 24	0. 71
13. というのは→ってい うのは (I)	3. 90	1. 12	3. 96	1. 05	3. 64	1. 36	0. 39
14. という＋名詞／形式 名詞→っていう＋名詞／ 形式名詞 (F)	3. 37	1. 24	3. 37	1. 17	3. 41	1. 49	0. 92
14. という＋名詞／形式 名詞→っていう＋名詞／ 形式名詞 (I)	3. 81	1. 25	3. 96	1. 17	3. 11	1. 36	0. 03 (**)
15. どうか／といいま すか→っていうか／って いいですか (フィラー) (F)	3. 02	1. 26	3. 01	1. 21	3. 05	1. 47	0. 90
15. どうか／といいま すか→っていうか／って いいですか (フィラー) (I)	3. 95	1. 19	4. 12	1. 05	3. 17	1. 46	0. 02 (**)
16. やはり→やっぱり (F)	3. 77	1. 04	3. 85	0. 99	3. 41	1. 19	0. 17
16. やはり→やっぱり (I)	4. 32	0. 94	4. 46	0. 76	3. 70	1. 36	0. 04 (**)
17. なければ→なきゃ (F)	2. 92	1. 22	2. 96	1. 17	2. 76	1. 43	0. 61
17. なければ→なきゃ (I)	3. 92	1. 01	4. 08	0. 87	3. 17	1. 24	0. 01 (**)
18. てしまう→ちゃう (F)	2. 98	1. 27	3. 03	1. 24	2. 76	1. 39	0. 47
18. てしまう→ちゃう (I)	2. 90	1. 27	2. 91	1. 24	2. 88	1. 40	0. 94
19. ておく→とく (F)	3. 61	1. 25	3. 74	1. 14	3. 00	1. 53	0. 08 (*)
19. ておく→とく (I)	4. 16	1. 00	4. 35	0. 78	3. 29	1. 36	0. 00 (**)

注 1) 差の検定結果は、使いたい群と使いたくない群の差の検定結果である。

注 2) 注 2) **p<0. 05、*p<0. 1

3.2.1 B類縮約形の全体的な傾向

全 26 項目の得点は「なければ→なきゃ (F)」、「てしまう→ちゃう (F)」、「てしまう→ちゃう (I)」を除きすべて中央値の 3.0 以上であり、中上級の学習者は、B 類の縮約形を使用する意識も高かったことがわかった。また、平均値が 4.0 以上の項目として高い順に、「ている類→てる類 (I)」(4.37)、「けれども→けど (I)」(4.35)、「やはり→やっぱり (I)」(4.32)、「では+否定→じゃ+否定 (I)」(4.30)、「いろいろな→いろんな (I)」(4.25)、「ておく→とく (I)」(4.16) である。また、「てしまう→ちゃう」を除いて、すべてフォーマルな場面の項目に比べてインフォーマルな場面の項目の得点が高かった。縮約形はインフォーマルな場面、親しい人間関係の中で使われることが絶対的に多いことが認識されていることが示唆された。嶺岸 (1999) と東 (2010) の指摘しているように、インフォーマルな場面では、上級学習者による「んだ」(A 類)、「けど」、「って○○」、「じゃ」、「てる」、「きゃ」、「ちゃう」、「とく」(以上は B 類) の使用は原形より母語話者の評価が高い。逆に、インフォーマルな場面での原形の使用に対しては、日本語能力と個人的印象に対する評価が厳しくなる。つまり、縮約形を使うことによって、日本人に日本語能力を高く評価してもらえるのだけではなく、自然な日本語を使用することもできると有益な点がたくさん存在するのである。したがって、日本語教育では、インフォーマルな場面での「あんまり」、「っていう／っていいます (文末)」、「っていうのは」、「っていう+名詞／形式名詞」、「なきゃ」、「ちゃう」の使用は平均得点 4.0 を上回らなかったため、もっと早期に導入することが望まれる。

一方、B 類も原形を上回るか同程度使用されている縮約形であることから、縮約形を使用したからと言って丁寧度が低下することはないと言える。フォーマルな場面においては、平均得点が中央値を下回ったものとして低い順に、「なければ→なきゃ」(2.92)、「てしまう→ちゃう」(2.98) が 2 つ挙げられる。インフォーマルな場面においては、平均得点が中央値を下回ったのは「てしまう→ちゃう」(2.90) が挙げられる。「なければ→なきゃ」に関しては、丁寧体基調の話し言葉ではその使用が著しくくだけた印象を与えるものではないため (堀口 1989、ボイクマン 2010)、その形と意味の認識ができることが大切である。また、「てしまう→ちゃう」は場面を問わず平均得点が中央値を下回ったことから、日本語教育では原形とともに縮約形も積極的に導

入したほうがよいと考えられる。

3.2.2 「使いたい」群と「使いたくない」群の比較

「使いたい」群と「使いたくない」群の間に差があるか検討するため、対応のない t 検定を行った。その結果、「では+否定→じゃ+否定(I)」、「ている類→てる類(I)」、「という→っていう／っていいいます(文末)(I)」、「という+名詞／形式名詞→っていう+名詞／形式名詞(I)」、「というか／いいいますか→っていうか／っていいいますか(フィラー)(I)」、「やはり→やっぱり(I)」、「なければ→なきゃ(I)」、「ておく→とく(I)」の 8 項目に有意な差、「いろいろな→いろんな(I)」、「けれども→けど(I)」、「ておく→とく(F)」の 3 項目に傾向差が見られた。どちらも、「使いたい」群の得点に比べて、「使いたくない」群の得点のほうが低かった。この 11 項目では「使いたくない」群の学習者は縮約形に対して積極的な使用態度を示さなかったということが示唆された。

その中で、「ておく→とく」を除き他の 10 項目はすべてインフォーマルな場面であるから、「使いたい」群に比べて、「使いたくない」群の学習者は教室習得の影響が大きいと考えられる。また、母語話者の会話を聞く機会がより限られていたことが原因であろうと考えられる。表 3 には学習者が教科書・教室以外で縮約形に触れる機会の調査結果を示す。「テレビ番組」の 1 項目に有意な差、「映画」の 1 項目に傾向差が見られたことから、「使いたい」群に比べて、「使いたくない」群の学習者が比較的テレビ番組と映画を通じて日本語に触れていない。また、「私人の電子メール」を除いて、すべての項目で「使いたくない」群の平均得点が低かったため、「使いたくない」群の学習者が日本語に触れることが比較的少ないことがわかった。台湾における JFL 環境では、日本語を実際に使用する機会が制限されるため、その使用機会の少なさが使用意識を低めるのではないと思われる。このことから、学習者の使用を促すためには、日本人との交流の場を提供する支援が特に重要だと言える。ちなみに、「使いたい」群に比べて、「使いたくない」群の学習者は、フォーマルな場面の 13 種類の縮約形のうち、8 種類において平均得点が高かったことから、発話場面がフォーマルなほうに偏っていることが示唆された。

台湾人中上級日本語学習者における
縮約形の使用意識に関する一考察

表3 教科書・教室以外で縮約形に触れる機会

	全員		使いたい群		使いたくない群		差の検定
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	F 値
1. 日本人友人	2.82	1.54	2.84	1.56	2.70	1.48	0.73
2. 動漫画	3.89	1.41	4.01	1.34	3.35	1.56	0.13
3. 映画	3.27	1.25	3.37	1.25	2.82	1.14	0.09 (*)
4. テレビ番組	3.93	1.16	4.08	1.11	3.23	1.16	0.01 (**)
5. 教師	2.91	1.23	2.92	1.21	2.88	1.32	0.91
6. SNS ²	3.40	1.25	3.46	1.25	3.11	1.18	0.30
7. 小説	2.62	1.32	2.70	1.32	2.23	1.26	0.19
8. ホームページ	3.45	1.21	3.50	1.17	3.23	1.35	0.47
9. ラジオ放送	1.82	1.21	1.87	1.26	1.58	0.91	0.30
10. 日本語の歌	3.54	1.30	3.56	1.30	3.47	1.28	0.79
11. 個人の電子メール	1.88	1.02	1.85	1.00	2.00	1.08	0.63

注1) 差の検定結果は、使いたい群と使いたくない群の差の検定結果である。

注2) **p<0.05、*p<0.1

また、縮約形の使用頻度はインフォーマルな場面がフォーマルな場面より多いのが通常多い。しかし、「使いたい」群において、「てしまう→ちゃう」の1項目、「使いたくない」群において、「という→っていう／っていういます(文末)」、「という＋名詞／形式名詞→っていう＋名詞／形式名詞」の2項目でインフォーマルな場面に比べてフォーマルな場面の平均得点が比較的高かった。これらの縮約形はフォーマルな場面でもくだけた印象を与えずに使用できる形式として固まっていると言えそうであるが、丁寧な表現として縮約しない形式だけを主に使用し、学習者が自然な縮約形の使用を抑えたことが原因として考えられる。

ただし、「使いたくない」群は「使いたい」群に比べて、すべてのB類縮約形に対して受動的な使用意識を示したわけではない。「使いたくない」群の学習者は「では＋否定→じゃ＋否定(F)」、「あまり→あんまり(F)」、「けれ

3. ソーシャルネットワークサービスのことである。

ども→けど(F)」、「という→っていう／っていいます(文末)(F)」、「
 のは→っていうのは(F)」、「という+名詞／形式名詞→っていう+名詞／形
 式名詞(F)」、「
 というか／といひますか→っていうか／っていいますか(フ
 ィラー)(F)」の7つの項目ではより高い平均得点を示した。これらはすべ
 てフォーマルな場面であり、丁寧度が落ちることのない縮約形として認識・
 使用されていると見てよい。やはり「使いたくない」群の学習者は教室習得
 に影響を与えられ、フォーマルな場面での使用に慣れていることが窺える。

4. まとめ

本研究では、台湾人中上級日本語学習者が会話において縮約形についてど
 のような使用意識を持っているかということを、アンケート調査を通じて検
 討を行なった。その結果、以下のことが明らかになった。

(1) 場面によって使用意識の低い項目がある。インフォーマルな場面で
 は、全体的に「んだ」、「こ/そ/あ/どんな／に」、「なんていうか(フィラー)」
 の使用意識の平均得点が4.0を上回らなかったことから、日本語教育ではも
 っと積極的に取り入れるべきである。

(2) フォーマルな場面において、丁寧体基調の会話における母語話者で
 は縮約形のほうが基本形と同程度となっているものでは、縮約形を使用する
 意識が低いものがある。全体的に平均得点3.5を上回ったものは、全38項
 目のうち、「こ/そ/あ/どんな／に」、「みんな」、「いろんな」、「けど」、「て
 る類」、「やっぱり」、「とく」の7つしかない。他の31項目は学習者が高い使
 用意識を持っていないため、フォーマルな場面の会話において縮約形が使用
 されても丁寧度が顕著に下がるものではないと認識されていないようであ
 る。日本語教育において、日本語学習者の円滑なコミュニケーション能力を
 養うために、学習者にA類とB類の縮約形はマイナスだというような印象を
 与えず、教科書の中に書かれていなくても、段階的にそれらを導入すべきで
 あり、学生に教科書以外の学習リソースを提供し、日本語の使用実態を説明
 すべきではないかと提言したい。

(3) 「使いたい」群の得点に比べて、「使いたくない」群の学習者は、「こ
 /そ/あ/どんな／に(I)」、「なんか(フィラー)(I)」、「じゃ+否定(I)」、「て
 いる類→てる類(I)」、「っていいます(文末)(I)」、「っていう+名詞／形式
 名詞(I)」、「
 っていうか／っていいますか(フィラー)(I)」、「やっぱり(I)」

「なきや(I)」、「とく(I)」の10項目に有意な差が見られ、インフォーマルな場面での縮約形の使用意識が顕著に現れていない。それらがその実際の場面で不適切な使用に繋がる可能性が高いので、「使いたくない」群の学習者に特別な指導をする必要がある。

参考文献

- 浅田浩文(2004)「フォーマルからインフォーマルへー中国人留学生の日本語発話資料に見られる言語接触ー」『福岡女学院大学短期大学部紀要一般教育・英語英文学』40、1-17 頁
- 上原聡・福島悦子(2004)「やっぱ丁寧に話しちゃいますんでー丁寧体の会話における縮約形とくだけた表現の使用ー」南雅彦編『言語学と日本語教育IV』東京くろしお出版、42-43 頁
- 小針奈津美(2013).『日本語学習者の縮約形使用意識に影響する諸要因』早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文概要書
<http://www.gsjal.jp/toda/dat/kob.pdf>
- 齋藤純男(1991)「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』6、89-97 頁
- 東会娟(2006)「会話コーパスに見る中国人日本語学習者の縮約形の使用状況」『言葉と文化』7、51-66 頁
- 東会娟(2008)「中国人上級日本語学習者の縮約形の使用状況」『言葉と文化』9、343-356 頁
- 東会娟(2009)「中国の大学日本語教育における縮約形の指導について」『言葉と文化』10、151-164 頁
- 東会娟(2010)「關於日語縮約形表達的研究—從日語為母語者的評估和學習者的習得現狀分析」『日語學習與研究』148、24-30 頁
- 土岐哲(1975)「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28、55-66 頁
- 福島悦子、上原聡(2004)「丁寧体の会話における縮約形使用に関する一考察ー日本語の母語話者と学習者の会話を比較してー」『国際文化研究科論集』12、121-130 頁
- ボイクマン総子(2010)「丁寧体の会話における日本語母語話者の音声転訛」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』25、17-35 頁
- 堀口純子(1989)「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文藝

言語研究言語篇』15、99-121 頁

嶺岸玲子（1999）「日本語学習者への縮約形指導のめやす—日本人による評価と使用率をふまえて—」『日本語教育』102 号、30-39 頁

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

羅濟立（2014）「台湾人日本語学習者における音声転訛形の使用状況—丁寧体の会話を中心に—」『台灣日語教育學報』23 号、196-219 頁

本論文於 2015 年 10 月 6 日到稿，2015 年 12 月 7 日通過審查。

付録

日語的口語中存在著不少所謂的「縮約形」，例如：「けれども→けど」、「てしまう→ちゃう」、「なければ→なきゃ」、「では→じゃ」、「やはり→やっぱり」等等。本問卷想調查您對使用縮約形的想法。問卷結果僅供整體統計分析使用，不做任何有關個人資料之評價，敬請放心作答。

一、基本資料

性別	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女
日語能力認證	<input type="checkbox"/> N1 (1 級) <input type="checkbox"/> N2 (2 級) <input type="checkbox"/> N3 <input type="checkbox"/> N4 (3 級) <input type="checkbox"/> N5 (4 級) <input type="checkbox"/> 沒有
日語會話能力	<input type="checkbox"/> 非常流利 <input type="checkbox"/> 還算流利 <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 會說一點 <input type="checkbox"/> 幾乎完全不會
期待自己的哪些口頭 會話能力可以再提昇? (可複選)	<input type="checkbox"/> 發音 <input type="checkbox"/> 詞彙 <input type="checkbox"/> 文法 <input type="checkbox"/> 流暢度 <input type="checkbox"/> 自然度 <input type="checkbox"/> 溝通能力 <input type="checkbox"/> 社交能力 <input type="checkbox"/> 話題之多樣性 <input type="checkbox"/> 其它
留學日本或滯日期間	<input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 1 至 3 個月 <input type="checkbox"/> 4 至 6 個月 <input type="checkbox"/> 7 至 12 個月 <input type="checkbox"/> 1 年至 2 年 <input type="checkbox"/> 2 年以上

二、除了在教室或教科書，您透過哪些管道知道縮約形呢? 5 為經常，4 為偶爾，3 為普通，2 為很少，1 為幾乎沒有。

1. 日籍友人 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有
2. 動漫 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有
3. 電影 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有
4. 電視節目 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有
5. 師長 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有
6. 社群網站 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有
7. 小說 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有
8. 網頁 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有
9. 收音機 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有

10.日文歌曲 ☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有

11.私人電子郵件☐經常 ☐偶爾 ☐普通 ☐很少 ☐幾乎沒有

12.其他

三、若擇其一，我傾向於想使用縮約形嗎？☐想☐不想

四、您使用縮約形的情形如何呢？請勾選以下各種縮約形的使用情形。場面分為兩種：A 是正式場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。5 為經常使用，4 為偶爾使用，3 為普通，2 為很少使用，1 幾乎不使用。

1. のだ類→んだ類

(A 是正式場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：何してるんですか。】☐經常使用 ☐偶爾使用 ☐普通 ☐很少使用
☐幾乎不使用

B【例：何してるんだ？】☐經常使用 ☐偶爾使用 ☐普通 ☐很少使用
☐幾乎不使用

2. こ/そ/あ/どのような／に→こ/そ/あ/どんな／に

(A 是正式場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：そんなに食べてはいけませんよ。】☐經常使用 ☐偶爾使用 ☐普通
☐很少使用 ☐幾乎不使用

B【例：そんなに食べちゃいけないよ。】☐經常使用 ☐偶爾使用 ☐普通
☐很少使用 ☐幾乎不使用

3. なにか→なんか（類似「ええと」「あの」「まあ」等等，兩句話中間插入的詞語。）

(A 是正式場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：私も、なんか、こんな人はやっぱり、あまり好きではありません。】
☐經常使用 ☐偶爾使用 ☐普通 ☐很少使用 ☐幾乎不使用

B【例：私も、なんか、こういうやつはやっぱり、あんまり好きじゃない。】

☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

4. みな→みんな

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：予選から敗退したのは、みんな監督の責任です。】 ☐ 經常使用

☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：予選から敗退したのは、みんな監督の責任だ。】 ☐ 經常使用

☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

5. なんというか→なんていうか（類似「ええと」「あの」「まあ」等等，兩句話中間插入的詞語。）

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：あっさりしてて、なんていうか、本当においしかったです。】

☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：あっさりしてて、なんていうか、本当においしかったです。】 ☐ 經常使用

☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

6. （それ）では→（それ）じゃ（接續詞）

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：じゃ、また明日お目にかかります。】 ☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用

☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：じゃ、また明日。】 ☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用

☐ 幾乎不使用

7. では+否定→じゃ+否定

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：解答は一つじゃありません。】 ☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通

☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：解答は一つじゃない。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用
☐ 幾乎不使用

8. いろいろな→いろんな

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：ここではいろんな動画が見られます。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用
☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：ここではいろんな動画が見られるよ。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用
☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

9. あまり→あんまり

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：宿題がたくさんあるから、あんまり遊べませんでした。】☐ 經常使用
☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：宿題がたくさんあるから、あんまり遊べなかった。】☐ 經常使用
☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

10. けれども→けど

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：遠いけど、歩きましょう。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通
☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：遠いけど、歩こう。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用
☐ 幾乎不使用

11. ている類→てる類

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：何してるんですか。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用

☐ 幾乎不使用

B【例：何してるの？】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

12. という→っていう／っていいいます（句末）

（A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。）

A【例：あんまり速くないけど、まあ、少し速いっていいいます。】☐ 經常使用
☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：あんまり速くないけど、まあ、少し速いっていうよ。】☐ 經常使用
☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

13. というのは→っていうのは

（A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。）

A【例：年末っていうのはどうしてこんなに忙しいのですか。】☐ 經常使用
☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：年末っていうのはなんでこんなに忙しいの。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用
☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

14. という＋名詞／形式名詞→っていう＋名詞／形式名詞

（A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。）

A【例：寿司っていうものは何度食べても飽きませんね。】☐ 經常使用
☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：寿司っていうやつは何度食べても飽きないね。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用
☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

15. というか／といいますか→っていうか／っていいいますか（類似「ええと」「あの」「まあ」等等，兩句話中間插入的詞語。）

（A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。）

A【例：「この問題は難しいです。」「っていうか、おかしいんですよ。」】

☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：「この問題は難しい。」「っていうか、おかしいんだよ。」】☐ 經常使用

☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

16. やはり→やっぱり

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：やっぱり日本料理はおいしいですね。】

B【例：やっぱり日本料理はおいしいね。】

17. なければ→なきゃ

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：パーティーは楽しくなきゃ、嫌です。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用

☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：パーティーは楽しくなきゃ、嫌だよ。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用

☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

18. てしまう→ちゃう

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：もう入っちゃいました。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

B【例：もう入っちゃった。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

19. ておく→とく

(A 是正式の場合，和不太熟悉的朋友講話；B 是非正式場合，和非常熟悉的朋友講話。)

A【例：コピー用紙がないから、ついでに買っといてくれませんか。】☐ 經常使用 ☐ 偶爾使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用

台湾人中上級日本語学習者における
縮約形の使用意識に関する一考察

B【例：コピー用紙がないから、ついでに買っといて。】 ☐ 経常使用 ☐ 偶爾
使用 ☐ 普通 ☐ 很少使用 ☐ 幾乎不使用